



坂元裕二脚本における日常性の演出 : テレビドラマ『カルテット』(2017年)の食事シーン分析

板橋, 今日子

(Citation)

日本文化論年報, 26:1*-47*

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481681>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481681>



坂元裕二脚本における日常性の演出—テレビドラマ『カルテット』（2017年）の食事シーン分析—

板橋 今日子

食べながら話すシーンをよく書くのも、「ついで」みたいに喋ってほしいからなんですけど、どんな大事な話も何かのついでみたいに始まって、そしてまた元の状態に戻るみたいなのが日常なのかなって思っています。（『脚本家 坂元裕二』より）

これは、脚本家・坂元裕二がテレビドラマにおける日常の表現と食事シーンの関係に言及した言葉である。本稿は、この坂元の言葉を導きの糸として、以下、坂元脚本における日常性が食事シーンによって効果的に演出されていることを解明していきたい。

はじめに

坂元裕二脚本のテレビドラマ『カルテット』（2017年）の6枚組DVD-BOXのうち3枚の表面には、ドラマで登場する食事シーンを切りとったものがプリントされている。唐揚げ、フライドポテト、パセリが添えられた唐揚げ（図1）。これらは、第一話での唐揚げ、第二話でのフライドポテト、最終話に登場するパセリが添えられた唐揚げのクローズアップショットであり、これらを含めた食事シーンが、ドラマ『カルテット』を彩っていることを象徴している。「人がご飯を食べるのを見るのが好きなんです」（『プロフェッショナル仕事の流儀』2018）と語る坂元は、この3つの食事シーン以外にも、彼の書く脚本の至るところに食事シーンを挿入している。なぜ坂元作品に食事シーンが多いのだろうか。そしてそれらの食事シーンがどれも魅力的なのはなぜなのだろうか。本稿では、坂元作品における食事シーンが日

常性を表現するための重要な役割をはたしていることを、『カルテット』の詳細な作品分析を通じて解明していきたい。

「脚本」とは、ト書き（人物の動作・状況説明）や台詞のみで作品を設計したもののことを指し、それを執筆する者を脚本家と呼ぶ。一般的に、すべての映像作品には脚本が存在し、それらの作品は脚本をもとに監督が演出（照明・衣装・俳優の振る舞いなど）を決定しながら制作される。坂元裕二は1990年代以降の日本のテレビドラマ界において最も影響力のある脚本家の一人であり、これまでに数々の脚本を手がけ、国内外においていくつもの賞が授与されてきた。坂元の脚本がこれほど評価されるのはなぜか。多くの作品が「坂元裕二脚本」として宣伝され、世間の注目を集めるのはなぜか。本稿のテーマはこれらの問いを根底としている。そしてその問いを深めるべく、本稿では「日常性」に着目した。また、その日常性がどのように演出されているかを考察するにあたって「食事シーン」の分析を行っている。

本稿は、坂元裕二脚本における日常性の演出について、坂元が脚本を手がけたテレビドラマ『カルテット』（2017年）の食事シーンを分析しながら、作品における食事シーンと日常性の重要性を考察したものである。第一章では、坂元裕二がどのような脚本家であるのかについて、第二章では食事シーンの役割について映画学の歴史を踏まえながらまとめ、最後に第三章で、具体的な食事シーンを挙げながら坂元脚本における日常性との関係性と重要性について論じる。



図1 カルテット DVD-BOXのうち3枚は、作中に登場する唐揚げとポテトのクローズアップショットがプリントされている

第一章 脚本家・坂元裕二

1.1 脚本家・坂元裕二

本稿は坂元裕二脚本について考察するものである。そこでまず、本節では、坂元がどのような人物であるかを踏まえ、脚本家としての研究対象として相応しいかを示したい。

坂元裕二の略歴を年表にまとめると、以下のようになる（表1）。¹

表1 坂元裕二の略歴年表

1967年	大阪府に生まれる
1987年	第1回フジテレビヤングシナリオ大賞を19歳で受賞しデビュー
1991年	ドラマ『東京ラブストーリー』最高視聴率:32% ...「月曜夜9時は街から女性たちが消えた」と社会現象として話題に
1996年	休養宣言
2004年	映画『世界の中心で、愛をさけぶ』 ... 行定勲、伊藤ちひろと共に脚本制作に携わり大ヒットし、これを機に復帰
2010年	ドラマ『Mother』 ... 後に海外でリメイクされたトルコ版は海外特別賞を受賞。 ... そのほか、韓国、フランス、ウクライナ、タイ、中国、スペインでもリメイク版が放送される
2017年	ドラマ『カルテット』
2021年	映画『花束みたいな恋をした』ドラマ『大豆田とわ子と三人の元夫』

1 本年表は、『脚本家 坂元裕二』（株式会社ガンビット、2018年）を主とした文献をもとに、筆者が独自に作成したものである

略歴年表では、坂元にとって転機となった作品や昨年公開された映画とドラマを挙げたが、坂元はこれまでに、全部で43本のドラマ、7本の映画に脚本家として携わってきた。(表2)

表2 坂元裕二の作品一覧

《ドラマ》

- 『GIRL-LONG-SKIRT ～嫌いになってもいいですか～』(1987年12月)
- 『サーキット・ナース』(1988年10月)
- 『同・級・生』(1989年7月3日-9月25日)
- 『東京ストーリーズ』第15回「CHEAP LOVERS」(1990年2月)
- 『日本一のカッ飛び男』(1990年4月9日-6月25日)
- 『東京ラブストーリー』(1991年1月7日-3月18日)
- 『大人は判ってくれない』第7回「1992年のバタフライ」(1992年2月)
- 『二十歳の約束』(1992年10月10日-12月21日)
- 『東京ラブストーリー特別編』(1993年2月)
- 『海が見たいと君が言って』(1994年9月24日)
- 『聖夜の奇跡』Chapter2「聖者が街にやって来る」(1995年12月23日)
- 『翼をください!』(1996年7月1日-9月23日)
- 『恋愛偏差値』第3章「彼女の嫌いな彼女」(2002年8月29日-9月19日)
- 『リモート』(2002年10月12日-12月14日)
- 『男湯』(2003年5月)
- 『あなたの隣に誰がいる』ディレクターズカット(2003年10月7日-12月9日)
- 『男湯2』(2003年11月)
- 『愛し君へ』ディレクターズカット(2004年4月19日-6月28日)
- 『ラストクリスマス』(2004年10月11日-12月20日)
- 『プロポーズ～世界で一番しあわせな言葉～』エピソード3「婿入り1の日」(2005年6月)

『トップキャスター』(2006年4月17日 - 6月26日)
『わたしたちの教科書』ディレクターズカット完全版(2007年4月12日 - 6月28日)
『猟奇的な彼女』(2008年4月20日 - 6月29日)
『太陽と海の教室』(2008年7月21日 - 9月22日)
『春のまぼろし』(2010年2月)
『Mother』(2010年4月14日 - 6月23日)
『チェイス～国税査察官～』(2010年4月14日 - 6月23日)
『世にも奇妙な物語 20周年スペシャル・秋～人気作家共演編～』「葉の恋」(2010年10月4日)
『さよならぼくたちのようちえん』(2011年3月30日)
『それでも、生きてゆく』ディレクターズカット完全版(2011年7月7日 - 9月15日)
『負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂～』(2012年9月8日 - 10月6日)
『最高の離婚』(2013年1月10日 - 3月18日)
『Women』(2013年7月3日 - 9月21日)
『最高の離婚 Special 2014』(2014年2月)
『モザイクジャパン』(2014年5月18日 - 6月15日)
『おやじの背中』第2話「ウエディング・マッチ」(2014年7月20日)
『問題のあるレストラン』(2015年1月15日 - 3月19日)
『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』(2016年1月18日 - 3月21日)
『カルテット』(2017年1月17日 - 3月21日)
『anone』(2018年1月10日 - 3月21日)
『Living』(2020年5月30日 - 6月6日)
『スイッチ』(2020年6月21日)
『大豆田とわ子と三人の元夫』(2021年4月13日 - 6月15日)

《映画》

『就職戦線異常なし』（1991年）※脚本協力として参加

『ユーリ ЮЛИИ』（1996年）※初監督作品（原案・脚本も担当）

『TOKYO EYES』（1998年）※日本語のセリフを担当

『世界の中心で、愛をさけぶ』（2004年）※行定勲、伊藤ちひろとの共同脚本

『ギミー・セブン』（2006年）

『西遊記』（2006年）

『花束みたいな恋をした』（2021年）

そしてそれらの作品を通して、坂元は国内外を問わず多くの賞を授与されている。具体的には、日本の「ザテレビジョンドラマアカデミー賞」では5つの作品²において脚本賞を受賞しており、2013年に放送された『Women』はカンヌ映画祭が主催するMIPCOM BUYERS' AWARD for Japanese Dramaにてグランプリを受賞、また2018年に放送された『anone』はフランスのカヌ映画祭において開催されたコンテンツ見本市「MIPCOM2018」で「自国で放送したい作品」として「MIPCOM BUYERS' AWARD for Japanese Drama」のグランプリを受賞している。

また坂元は、2016年から東京芸術大学大学院映像研究科映画表現技術脚本領域の教授として脚本の講義を受け持っている。すなわち、現在活躍中の脚本家だけでなく、脚本の道を志す未来の脚本家にも影響力を持っている人物であることが分かる。直近では、フジテレビが主催する第33回「ヤングシナリオ大賞」（2021年）で大賞を受賞した生方美久が、取材に対し「坂元裕二さんみたいに、唯一無二といわれる脚本家になりたい」とコメントを残している。³ 彼女は今回の受賞を機に若手脚本家として注目を集め、受賞作

2 『わたしたちの教科書』『Mother』『それでも、生きてゆく』『最高の離婚』『カルテット』

3 第33回「ヤングシナリオ大賞」大賞は生方美久さんの「踊り場にて」！「坂元裕二さんみたいに、唯一無二といわれる脚本家に」（<https://www.fujitv-view.jp/article/post-435944/> 最終閲覧日 2022年1月8日

の『踊り場にて』は2021年12月30日にフジテレビにて放送され、今後の活躍がもっとも期待される新進気鋭の脚本家である。そのような若手脚本家が目標とする脚本家としても、坂元の影響力は明らかである。

過去の功績を積み上げてきた結果は、近年の作品広報からも読みとれる。2021年に公開された映画『花束みたいな恋をした』では、映画のキャッチコピーに「いまを生きるすべての人へ——坂元裕二脚本で贈る、終電後に恋に落ちた2人の忘れられない5年間」⁴と綴られている。これは、「坂元裕二脚本」と掲げることで、観客が作品に対する期待と信頼を抱くことを狙った広報だと考えられる。他にも、青土社が刊行する芸術総合月刊誌『ユリイカ』の2021年2月号でも坂元裕二の特集が組まれるなど、今もなお世間からの注目が集まる脚本家であることは明らかである。

1.2 坂元裕二脚本の特徴

では、坂元はどのような脚本を書いてきたのだろうか。本節では、坂元裕二脚本の特徴や独自性を明らかにしていく。しかし脚本の特徴をわかりやすく分類することは極めて難しい。むしろ、簡単に分類できてしまう脚本を論文に取り上げる意義はあまりないだろう。そのため一概に「坂元の脚本はこのようなものである」と結論づけることはできないが、彼の残した言葉や周囲の評価から彼の脚本の特徴を浮かび上がらせ、考察していきたい。本節では具体的に、坂元は何を思って脚本を執筆するのか、そして坂元は脚本を通して何を描こうとしているのかについて論じている。

まず、坂元が脚本を執筆する根底には、どのような思いがあるのだろうか。2018年にNHKで放送されたドキュメンタリー番組『プロフェッショナル仕事の流儀——「生きづらい、あなたへ～脚本家・坂元裕二～」』において、坂元は脚本を「こんな風に思う人は少ししかいないって人のために書きたい」と述べている。

4 映画『花束みたいな恋をした』公式サイト（<https://hana-koi.jp/> 最終閲覧日2022年1月9日）

坂元「すごく簡単に言うと、多数派か少数派かっていったら少数派のために書きたい。それが一番大きいですね僕は。こんな風に思う人は少ししかいないって人のために書きたい。ああ私だけが思っていたんじゃないなかったんだって。10元気な人が100元気になるための作品はたぶんたくさんあるけど、僕はマイナスにいる人がせめてゼロになる、-5が-3くらいになるとか、そこを目指しているから」(『プロフェッショナル仕事の流儀』2018)

つまり坂元の脚本は、大衆（多数派）に向けてではなく、ごく一部の人（少数派）の痛みに寄り添うように執筆されている。しかしそれは結果的に、多くの人に届く脚本となり、評価されてきた。ドラマ『カルテット』で家森論高を演じた高橋一生と、世吹すずめを演じた満島ひかりは坂元の脚本について以下のようなコメントを残している。

高橋「坂元さんの脚本力とその世界観って、なんだかとても繊細でそれでもすごく勇気があって、全部が全部すばらしいっすね世界ってというふうになっちゃうんですね。(中略) 俗に言う『落ちこぼれている』とか『ちゃんとした職に就いていない』とか『あの人性格がアレだよ』って言われてしまう、その人たちすらもたぶん包んでいこうとする坂元さんの世界ってあるんですよね、決して否定しなくて。その人たちはその人たちでしょうがないのっていうのを描いてしまうので。そういう生きることを肯定していくみたいな力は坂元さんの脚本にはとてもあるような気がして」(『プロフェッショナル仕事の流儀』2018)

満島「なんかどこかみんなかわいらしくてさみしくてみたいなの、つたなさとかもあって、すごくちゃんと優しくいろんな人たちの痛みや悲しみに寄り添っている言葉がいっぱいあるので、一生懸命コッコツ生きている人が好きなんでしょうね。そういうセリフですよ全部」(『プロフェッショナル仕事の流儀』2018)

2人のコメントに共通しているのは、坂元の脚本は、決して誰かを取りこぼすことなく、日常に繊細に寄り添うものであるという点である。そしてこの、脚本に書かれた台詞を口にし、ト書きを演じる役者だからこそ感じる坂元脚本の特徴は、坂元が根底に抱く「こんな風に思う人は少ししかいないって人のために書きたい」という想いと重なっている。だからこそ、坂元の脚本は演者を通して観客に届く作品となっているのではないだろうか。

では、坂元は脚本を通して何を描こうとしているのだろうか。坂元は、「ドラマってというのは人と人の関係を描くもの」と語り、「人は誰かとの関係の中にある」とも述べている（『プロフェッショナル仕事の流儀』2018）。そしてその人（登場人物）の描き方について、坂元が意識していることの1つには、台詞があると考え。坂元脚本における台詞ないし会話シーンには、一見ストーリーを展開させる意味において重要ではなさそうに見える「雑談」が多く用いられている。これは、「どんな面白いストーリーより本当にその人たちが生きているように見えることが僕は1番好きだし、自分でもそういうものを作りたい」（『プロフェッショナル仕事の流儀』2018）と語る坂元の意思が大きく反映されている部分だと考える。その理由としては、坂元自身が台詞について「説明のための台詞を減らし、作品のための登場人物ではなく、登場人物がたまたまそこで生きていたのを作品が切り取っているような描き方を意識している」と述べているからだ。以下は少々長い引用になるが、坂元脚本の特徴を坂元自身の言葉で具体的に説明している重要な部分であると考え、そのまま紹介したい。

まずは、説明のための台詞をできる限り減らしたいというのがあって。台詞って実は大半がなにかしらの説明台詞で、強いストーリーを描こうとするとどうしても登場人物による説明台詞が必要になってくるんだけど……。たとえば主人公の友達役が主人公の感情表現を促すために存在させられている様子って、僕は見えてて退屈なんですよね。周囲の大人たちの役も主人公の感情を説明するための質問係であったり、指摘係だったりする。でも、その大人たちにも日々嫌なことがあっ

たり、今日なにを食べようかなとか考えているだろうし、普段は主人公のこと以外を考えながら生活しているわけだからね。なんで画面に出てきた途端に主人公の感情のために奉仕させられるんだろう？って思うんです。だからできるだけ、みんなそれぞれの人生があって、その日他にも用事があって、今たまたまここにいるんですよっていう状況を考えようとはしています。(『ユリイカ』2021: 44)

つまり坂元は、ストーリーを展開させたり、登場人物や場面の情報を提示したりするためだけの、機能的な台詞をできるだけ用いないことで、人（と人との関係性）を忠実に描こうとしている。多くの人が日常的に楽しんでいる目的のない会話＝雑談を台詞に入れることで、「本当にその人たちが生きているように見える」脚本となっているのだろう。そしてその点に対し、社会学者の太田はドラマ『カルテット』で繰り返される「会話劇」について以下のように述べている。

トレンドドラマ⁵の会話には、恋愛の成就というはっきりとした目的がある。だが『カルテット』の会話には、目的がない。それは語の純粹な意味において雑談であり、それ自体のためになされる会話だ。(『ユリイカ』2021: 222)

また坂元が脚本を手がけ2021年に放送された『大豆田とわ子と三人の元夫』では、岡田将生演じる3番目の元夫・中村慎森が第一話で「雑談って、いります？」と社内会議の空気を冷やす。そしてこの台詞がなされるのが彼の登場する最初のシーンであるが、最後に登場する第十話のシーンで、彼は雑談ができるようになっていく。この中村慎森がドラマを通して遂げた変化は、雑談の重要性と豊かさに対する坂元の考えを反映させているものではないだろうか。そして『大豆田とわ子と三人の元夫』において、雑談のシーンは言

5 主に1980年代後半から1990年代前半のバブル期にかけて制作された日本のテレビドラマで、王道のラブストーリーが主流であった

うまでもなくとても多い。

ここまでをまとめると、坂元が唯一無二の脚本家である特徴として、ごく一部の人間までも寄り添う脚本であること、そしてそのために、巧妙に雑談を交えた台詞で生きた登場人物とその関係性をリアルに描いていることが挙げられる。しかし、坂元脚本の特徴、そして魅力は、もちろんそれだけではない。本稿では、坂元の脚本を特徴づける点として「日常性」と、その演出に大きく関係すると考えられる「食事シーン」に着目した。着目した理由は第三章でも詳しく説明するが、大きな背景としては坂元自身が日常性を演出するために食事シーンを用いていることについて以下のように述べているからである。以下の引用は、本稿冒頭のエピグラフと同じものであるが、重要であるため再度引用する。

食べながら話すシーンをよく書くのも、「ついで」みたいに喋ってほしいからなんですけど、どんな大事な話も何かのついでみたいに始まって、そしてまた元の状態に戻るみたいなのが日常なのかなって思うんです。(久保 2018: 9)

つまり、坂元は日常性を表現するための重要なものとして食事シーンの挿入を自覚的に選択している。そこで本稿の第三章では、具体的にドラマ『カルテット』における食事シーンの分析をもとに、坂元脚本における日常性と食事シーンの関係性について論じていく。しかしその前に、映画学の歴史において食事シーンがどのように論じられてきたかについて述べておくことで、論を深めたい。

第二章 映像作品における食事シーン

2.1 ハリウッド映画における食事シーンの役割

本章では、ドラマ『カルテット』の作品分析に移る前に、映画学の歴史において食事シーンがどのように描かれてきたか、論じられてきたかについて

述べ、第三章における作品分析の意義や説得性を深める。

ここでは、アメリカの文学研究者 Boswell (1993) の論文を参考に、ハリウッド映画における食事シーンの役割について理解を深めたい。論文の中で Boswell は、具体的にハリウッド映画作品を挙げながら「食事シーンは映画における登場人物の社会階級、民族性、国籍を理解するのに肝要でありうる」と述べ、また「登場人物同士の関係性を明らかにすることができる」と論じている。さらに具体的には「プロットや登場人物における葛藤を理解」したり、「登場人物を活気づけ、プロットの展開に貢献し、場面への理解に強力な方法」として作品における食事シーンの役割と重要性を述べている。つまり食事シーンは「プロットや登場人物を構築するのに重要なガイド」にもなっている。そしてそれらの指摘はハリウッド映画作品に食事シーンが用いられる背景とも重なっている (Boswell 1993: pp7-23)。

2.2 映画学における映像作品と食事シーンの関係

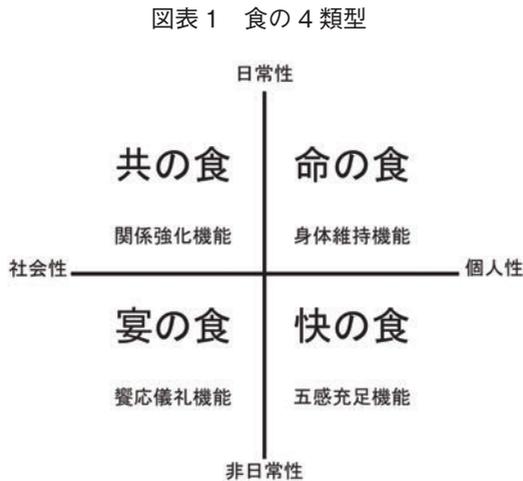
ハリウッド映画に限らず、日本のテレビドラマも含め、食事シーンは映像作品史における数々の作品を彩ってきた。本節ではその点を深めたい。

まず映画は 19 世紀末にフランスのリュミエール兄弟 (ルイ、1864-1948、兄オーギュスト、1862-1954) によって発明されたもので、当時のそれは映画術 (シネマトグラフ) と呼ばれた。リュミエール兄弟による最初期の映画には、『赤ちゃんの食事』(1895) というものがあり、赤ん坊が両親に挟まれて離乳食を摂っている様子が描かれている。これは、世界で初めて撮られた食事シーンとも考えられる。そして日本にも撮影技師が来日し、シネマトグラフを用いて撮影が行われたが、その際、撮影技師に対して提示された 3 つの撮影指針のなかには「食事のシーンを撮ってくる」というものが含まれていた。⁶ 日本を含めて世界各地で撮影された映像はパリ万博で上映され、そのなかには「日本の食事」と題され、御膳の上に載せられた食べ物を男が

6 残り 2 つの撮影指針は、「人々が労働している場面を撮ってくる」と「祭礼や儀式を撮ってくる」とであった

食べる映像が存在している。このような事例から、高橋（2011）は「映画は、食べるシーンを描くことが得意である、というメディア特性を初発期から持っていた」と述べている。また映画における食事シーンの意義として「食べる仕草や、食べる相手、食べ物、食べる空間や環境によって、主人公の心情や家族との人間関係、自分の置かれた状況を雄弁に語り出すことができた」と論じている。

関沢（2014）は、映画における食事シーンを、個人性と社会性、日常性と非日常性の2軸を組み合わせた4つの象限に分類している。そしてその4つの象限における食事は、それぞれ「身体維持機能」「関係強化機能」「五感充足機能」「饗応儀礼機能」といった役割をもつと述べ、33の作品を具体例として提示しながら論じている。（図表1）



ここにおける食事シーンの「関係強化機能」については第三章の作品分析でも改めて触れていきたい。関沢が33作品もの具体例に挙げたように、食事シーンは映画制作初期から今日まで数々の映像作品に登場し、作品と食事シーンの親和性についても多く論じられてきた。しかしそれは映画に限った話ではない。今泉（1999）は、「食事シーンを多用することは、一九三〇年代以降の小市民映画で日常生活を描くさいの常套手段として確立されていっ

た」と述べ、「日常生活のなかでも食事風景を描こうとすることは、のちのテレビのホームドラマに受け継がれていった」と論じている。つまり映画で用いられた食事シーンを通じた演出はテレビドラマにも応用されている。

前述に坂元脚本の特徴として「巧妙に雑談を交えた台詞で生きた登場人物とその関係性をリアルに描いていること」を挙げたが、会話シーンと食事シーンは密接に関係している。今泉（2002）は、映画において食卓シーンが普遍的に描かれるのは「食卓を囲むひとびとが食べる行為だけでなく、会話も共有しているから」であり、「食卓の空間では、人間関係が浮き彫りにされていく」と述べている。『カルテット』における食事シーンにも該当するものが多く、ここでいう「食卓」は『カルテット』の舞台となる軽井沢の別荘にもセットとして存在する。その「食卓」は4人が囲むダイニングテーブルであり、ときには暖炉前のローテーブルとして、カウンターキッチンとして、またレストランのテーブルとしてフレーム内に登場する。そしてそこで繰り広げられる会話（ないし雑談）が作品を魅力的に彩っている。

上述に挙げた数々の食事シーンについての指摘は、次章で論じる『カルテット』の分析を通じた食事シーンの重要性にも通じている。映像作品において食事シーンが映画学の歴史においても国内外を問わず重要な役割を果たしてきたことが明らかになったところで、さっそく本題の作品分析へうつっていく。

第三章 ドラマ『カルテット』の作品分析

3.1 坂元裕二脚本ドラマ『カルテット』を分析する根拠

坂元はテレビドラマの名手として数々のドラマ脚本を執筆してきたが、本稿における具体的な分析と考察の対象には、テレビドラマ『カルテット』を選んだ。この作品を分析対象とするのは、坂元裕二脚本作品の中でも評価が高いうえ（表3）、全体的に食事シーンが多いだけでなく、1つ1つの食事シーンが興味深く特徴的であるからだ。以下の表は、『カルテット』が放送された2017年に、作品に対して授与された受賞内容をまとめたものである。

表3 『カルテット』の受賞内容

受賞内容	賞について
第7回コンフィデンスアワード・ドラマ賞 ⁷ - 作品賞 - 脚本賞	「コンフィデンスアワード・ドラマ賞」 …視聴者による満足度と有識者の意見をもとに、“各期の質の高いドラマ”を表彰
コンフィデンスアワード・ドラマ賞 年間大賞 2017 ⁸	
第92回ザテレビジョンドラマアカデミー賞 ⁹ 脚本賞	「ザテレビジョンドラマアカデミー賞」 …国内の地上波連続ドラマを読者、審査員、TV記者の投票によって部門別にNo.1を決定する特集
ギャラクシー賞 ¹⁰ 2017年3月度月間賞	「ギャラクシー賞」 …放送批評懇談会が日本の放送文化の質的な工場を願い、優秀番組・個人・団体を顕彰する
第54回ギャラクシー賞 テレビ部門 優秀賞	

7 「第7回 コンフィデンスアワード・ドラマ賞」

(<https://www.oricon.co.jp/confidence/special/54647/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

8 「コンフィデンスアワード・ドラマ賞 年間大賞 2017」

(<https://www.oricon.co.jp/confidence/special/54646/#link11> 最終閲覧日 2022年1月18日)

9 「受賞結果総評 | 第92回ザテレビジョンドラマアカデミー賞」

(<https://thetv.jp/feature/drama-academy/92/awards/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

10 「ギャラクシー賞概要 - NPO 法人 放送批評懇談会」

(<https://www.houkon.jp/galaxy/galaxy/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

東京ドラマアウォード ¹¹ 2017 優秀賞	「東京ドラマアウォード」 …「世界に見せたい日本のドラマ」というコンセプトのもと 2008 年より始まった「東京ドラマアウォード」は、芸術性や良質な番組の質の高さといった基準とは異なる、市場性や商業性に焦点を充てたアウォード。
第 68 回芸術選奨文部科学大臣賞 ¹² 放送部門受賞	「芸術選奨文部科学大臣賞」 …文化庁が各年度毎に芸術各分野において優れた業績をあげた人物を表彰

上記の通り、『カルテット』はテレビドラマとして作品全体の質を評価されているだけでなく、坂元が手がける「脚本」においてもコンフィデンスアワード・ドラマ賞とザテレビジョンドラマアカデミー賞の2つにおいて脚本賞を受賞している。これらの賞は視聴者からの支持だけではなく、テレビドラマに精通する有識者の見解も含めての受賞となっており、『カルテット』は社会的・文化的にも評価されている作品であることが明らかである。

また視聴者からの支持も明らかだ。2017 年同時期に TBS で放送されたテレビドラマは『カルテット』の他に『A LIFE～愛しき人～』『下剋上受験』の2本存在するが、それぞれの 2022 年 1 月 16 日時点における公式 SNS アカウントのフォロワー数は以下の通りである（表 4）。

11 「国際ドラマフェスティバル：東京ドラマアウォード」
(<https://j-ba.or.jp/drafes/award/index.html> 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

12 「芸術選奨 | 文化庁」
(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/jutenshien/geijutsuka/sensho/> 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

表 4 2017 年冬放送の TBS ドラマ公式 SNS アカウントのフォロワー
(2022/1/16 時点)

	『カルテット』	『A LIFE ～愛しき人～』	『下剋上受験』
Twitter	81521 ¹³	18621 ¹⁴	7552 ¹⁵
Instagram	「6.1 万」 ¹⁶	「1.4 万」 ¹⁷	6282 ¹⁸

2017 年冬に放送されたテレビドラマはその他にもいくつか存在するが、公式 SNS アカウントが存在しないものもあり、また放送局によって SNS アカウントに対する注力度合いが異なると考えたため、比較対象は TBS にて放送されたこの 2 本のドラマを選んでいる。また一般的にテレビドラマの人気は視聴率で測られることが多いが、筆者は視聴率と視聴者からの支持の相関はあまりないと考えている。そもそも視聴率とは無作為に選ばれた世帯を標本として視聴状況を調査し、どのくらいの割合で視聴されているかを示すものであるが、昨今のドラマを視聴する媒体は、インターネットの普及によりテレビに限らない。また西山大貴、石井晃、鈴木康之（2019）は、毎分の視聴数データから各時刻における視聴者の流入数や流出数（視聴者の行動）を読み取り、視聴率と番組の人気や面白さの関係を定量的に測ったが、「研究

13 【公式】火曜ドラマ『カルテット』(@quartet_tbs) / Twitter

(https://twitter.com/quartet_tbs 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

14 『A LIFE ～愛しき人～』TBS テレビ (@A_LIFE_tbs) / Twitter

(https://twitter.com/A_LIFE_tbs 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

15 金曜ドラマ『下剋上受験』★金曜よる 10 時 (@gekokujo_tbs) / Twitter

(https://twitter.com/gekokujo_tbs 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

16 火曜ドラマ「カルテット」(@quartet_tbs)・Instagram

(https://www.instagram.com/quartet_tbs/ 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

17 日曜劇場「A LIFE ～愛しき人～」TBS (@a_life_tbs)・Instagram

(https://www.instagram.com/a_life_tbs/ 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

18 金曜ドラマ『下剋上受験』公式! (@gekokujo_tbs)・Instagram

(https://www.instagram.com/gekokujo_tbs/ 最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日)

の結果から、合計視聴数と番組の面白さは必ずしも一致するわけではない」と結論づけている。以上より、公式 SNS アカウントのフォロワー数を通してドラマの人気を比較したが、表 4 より『カルテット』における視聴者からの支持が高いことは明らかである。

また「食事シーン」を分析するにあたって『カルテット』を対象とする根拠については、食事がテーマでない作品にもかかわらず、食事シーンがはなはだしく多いことにある。『カルテット』は全 10 話構成で、1 話平均 45 分、合計約 450 分に及ぶ連続テレビドラマである。その約 450 分のうち、食事シーンは合計 143 回登場しており、平均すると 3～4 分に 1 回の割合で食事シーンが描かれていることになる。「シーン」とは、ひとつの空間において、切れ目のない持続する時間のなかで発生する出来事を描いたひとまとまりの映像の単位である。したがってここでの食事シーンとは、フレーム内に食事が映し出されているシーン、もしくは作品中の台詞で食事や食べ物について触れているシーンのことを指す。なお、ひとつのシーンに複数の食事が登場したり、会話中に複数の食べ物に触れられたりした場合も、食事シーンは 1 としてカウントしている。この基準に基づいて筆者が独自にカウントした食事シーンの登場回数は、以下の通りである（表 5）。

表 5 『カルテット』における食事シーンの登場回数

第 1 話	第 2 話	第 3 話	第 4 話	第 5 話	第 6 話	第 7 話	第 8 話	第 9 話	第 10 話	合計
14	15	14	11	7	22	9	23	13	15	143

表より、1 話約 45 分のうち、食事シーンが平均 14～15 回登場している計算となる。つまり、『カルテット』では食事シーンが平均して 3～4 分に 1 回登場している。そして今日、テレビドラマには、昨年劇場版まで公開された『きのう何食べた?』や、現在 Season9 まで続いている『孤独のグルメ』など、「食事」をテーマとしたものが多く存在する。しかし『カルテット』をそれに分類する者は少ないだろう。では、作品を構成するすべてのシーン

に脚本家の意図があると考えたとき、食事がメインテーマではない作品における食事シーンにはどのような役割や意味が与えられうるのだろうか。本章の問いはここにある。

3.2 テレビドラマ『カルテット』における食事シーン監修陣

『カルテット』の制作において食事シーンが重要視されていたことは、食事シーン監修陣の人選を見ても明らかである。本作でフードスタイリストとして食事シーンを監修したのは、飯島奈美、板井うみ、岡本柚紀の3人であった。フードスタイリストとは、撮影の現場において被写体である料理を調理し、食器やテーブルクロスなどの小道具をセッティングすることで「シズル感」¹⁹（食欲を刺激し、美味しそうに見せること）を演出する役割を担う人のことを指す。日本では1990年代以降、食の豊かさにも注目が集まるようになり、1996年にはフードスペシャリスト協会が設立されている。その2年後にはフードコーディネーター協会が設立され、フードスタイリストを含む、フードスペシャリスト、フードコーディネーターが映像作品における食まわりの仕事を担うようになった。『カルテット』のフードスタイリングを担当した3人のうち、特に飯島奈美はこれまでも数々の映画やテレビドラマ、CMなど幅広い分野で料理監修を務めている。なかでも2013-2014年放送のNHK連続テレビ小説『ごちそうさん』では、全編にわたり料理を担当し、これに対して第80回ザテレビジョンドラマアカデミー賞においてザテレビジョン特別賞が授与されている。

もし作品において食事シーンが重要視されていなければ、上述のように名のあるフードスタイリストを起用しなかつただけでなく、『カルテット』の公式ホームページ²⁰にフードスタイリストの名前をスタッフとして連ねることもなかつただろう。そして『カルテット』の放送を経た後も、飯島は坂

19 “sizzle (シズル)”を語源としており、肉を焼く際の「ジュー」という音が英語の擬音語で sizzle と聞こえることが由来とされている

20 スタッフ | TBS テレビ：火曜ドラマ『カルテット』

(<http://www.tbs.co.jp/quartet2017/staff/> 最終閲覧日：2022年1月6日)

元脚本のテレビドラマ『大豆田とわ子と三人の元夫』（2021年）において料理監修者としても携わっている。そのことから、制作スタッフの彼女に対する信頼の厚さや、『カルテット』でのフードスタイリングが評価されていたことが推測できる。

3.3 『カルテット』における食事シーンの役割分析

ここから、『カルテット』における食事シーンの役割について、具体的な作品分析を行いながら考察していく。『カルテット』のあらすじは次の通りである。このドラマは、都内で“偶然”出会った演奏者の男女4人が、弦楽四重奏（カルテット）を組み軽井沢で共同生活を送るようになるところから始まる。第1ヴァイオリン奏者の巻真紀（松たか子）、第2ヴァイオリン奏者の別府司（松田龍平）、チェロ奏者の世吹すずめ（満島ひかり）、そしてヴィオラ奏者の家森論高（高橋一生）の4人で組まれる弦楽四重奏団の名前は「カルテットドーナツホール」。4人は音楽家を志すも夢破れたまま30代を迎え、それぞれに壮絶な過去と秘密を抱えていた。このドラマは、4人の過去と秘密を解き明かしながら、カルテットとしての4人のこれからやそれぞれの関係について、サスペンス要素を交えながら物語が進んでいく。

『カルテット』における食事シーンの多さは上述したが、テレビドラマは脚本家のみで制作されるわけではないため、坂元脚本の特徴と言い切れるか疑念を抱く者もいるだろう。各シーンに食べ物の要素を入れるか入れないかの選択は、脚本のなかに情報を入れ込むことで脚本家がコントロールすることができるが、各ショットをクローズアップにするか否かという選択は演出の問題であり、基本的に現場の監督が決定するものである。実際、坂元はインタビューの中で、作品の撮影中に現場に赴いて直接スタッフや俳優たちに指示することはないと述べている。

——セリフの読み方やお芝居について、何かリクエストをされることはありますか？

[筆者による補足：続く文章は、坂元自身の言葉である] 脚本は設計図ですし、どういうドラマなのか、どこを目指せばいいのかも含めて、みんなの想像力を呼び起こすものを書かないと意味がないので、僕から何かを言うことはありません。どうやって登場人物が生きていくのかは、役者さんが現場に立って、呼吸をしながら作っていくもの。撮影現場に行かない僕にはわからないことですよね。²¹

つまり『カルテット』において料理がクローズアップされているシーンは、監督が決定した演出によるものだが、このドラマにおいて演出を務めたのは土井裕泰であり、「僕は『カルテット』のプロデューサーも兼ねていて、全ての回の脚本の打ち合わせにはほぼ参加をしていました」(『ユリイカ』2021: 80)と述べている。また『カルテット』は、土井と坂元が企画の立ち上げ当初から関わっていたオリジナル脚本だ。坂元が脚本を通して意図していたものを、二人三脚で脚本を制作していた土井は演出を通して作品に込めることは可能であったことが分かる。ちなみにカルテットを公開して3年後、2人は映画『花束みたいな恋をした』(2020年)を製作した。このことから、2人のお互いへの信頼は厚いものであることが窺える。

もとより、『カルテット』における食事シーンは脚本段階からストーリーに組み込まれている。その脚本をもとに、登場人物が単に食事をしている映像ではなく、彼らが何を食べているのかを一度観客に提示する必要性を感じ、土井監督は料理にクローズアップする演出を決定しているのだと考えられる。そしてそれが結果として49回(表6)に及ぶクローズアップショットとなり、『カルテット』は食事シーンの多さが際立つ作品となっている。一般的にクローズアップショットとは演出家が観客に注目してほしい部分を大きく切りとって提示するショットであり、観客に重要な意味があると伝える役割があると考えられるので、これは、平均9～10分に1度、ドラマのフレーム内に料理がメインで映され、それらが重要であることを意味する。

21 「脚本家・坂元裕二インタビュー(1)」『CRÉA』2018年10月19日
(<https://crea.bunshun.jp/articles/-/20996?page=3> 最終閲覧日2021年12月16日)

表6 『カルテット』における食事シーンのうち、料理がクローズアップで映されたショット数

第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	第6話	第7話	第8話	第9話	第10話	合計
3	5	6	4	1	11	5	7	4	3	49

食事シーンの多さが坂元脚本ドラマ『カルテット』の特徴であることが明らかになったところで、早速本題に入りたい。食事シーンはシーンの1種にすぎないが、現在20カ国以上で翻訳されている『映画を書くためにあなたがいなくてはならないこと』（原題:SCREENPLAY）において、著者のシド・フィールド（2009）は「シーン」の目的についてこのように述べている。

シーンの目的は2つある。“ストーリーを前に転がすこと”と、“人物についての情報を明らかにしていくこと”である。これらの二つの内のどちらか、もしくは両方ともがシーンの中になれば、そのシーンは必要ない。（フィールド 2009: 191）

では、上記ふたつの目的を達成するためのシーンに「食事」の要素を加えたとき、その食事シーンにはどのような役割や意味が与えられるのだろうか。以下、ドラマ『カルテット』における食事シーンの役割について、シド・フィールドが提示するシーンの2つの役割に基づいて具体例を挙げながら考察したい。また、本稿に挿入されているショットの図はすべて Amazon Prime Video で配信されている『カルテット【TBS オンデマンド】』より切り取っている。²² また以後、登場人物4人はそれぞれ以下のように提示する（表7）。

22 「カルテット【TBS オンデマンド】」 Amazon Prime Video
 (https://www.amazon.co.jp/gp/video/detail/B01NAUGPBE/ref=atv_hm_hom_1_c_105khD_brws_2_3 最終閲覧日 2022年1月19日)

表7『カルテット』の登場人物と本稿における呼称、俳優

登場人物	本稿における呼称	俳優
巻真紀	真紀	松たか子
別府司	司	松田龍平
世吹すずめ	すずめ	満島ひかり
家森諭高	諭高	高橋一生
巻幹生	幹生	宮藤官九郎
来杉有朱	有朱	吉岡里帆
ベンジャミン瀧田	ベンジャミン瀧田	イッセー尾形

3.3.1 今後の展開を暗示し、“ストーリーを前に転がす”ための食事シーン

『カルテット』における最初の食事シーンは、第一話の開始から約10分後に繰り広げられる夕食のシーンである。食卓には大皿に盛られた唐揚げが乗っている。司とすずめがレモンをかける瞬間、カメラは唐揚げをクローズアップする(図2)。これから共同生活をスタートさせる4人はテーブルを囲んでビールで乾杯するも、唐揚げにレモンをかけるかかけないかで意見の食い違いが起こり、お互いの性格が露わになっていた。

この唐揚げのシーンは、坂元が『カルテット』の脚本を執筆するうえで最初に書き起こしたものであった。

何も企画がなくてどうしようか?という段階で、とりあえず僕は唐揚げのシーンを書いたんです。(中略)ストーリーもないまま「唐揚げにレモンをかけるかかけないかで喧嘩する話です」って1話を提出し

ました（笑）。（久保 2018: 25）

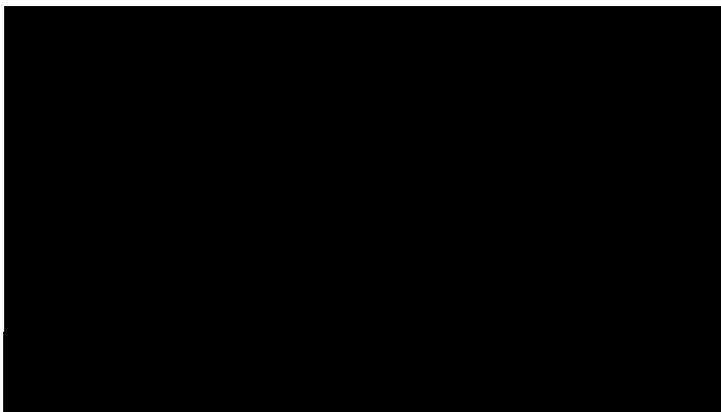


図2 司とすずめがレモンをかける際のクローズアップショット（第一話 10:45）

しかしこの食事シーンは、単なる会話劇にとどまらない。社会学者の太田省一（2021年）はこのシーンについて以下のように述べている。

「唐揚げにおけるレモン」をめぐる話は、ドラマが進むと、真紀と夫・幹生（宮藤官九郎）の夫婦間のすれ違いを象徴するエピソードとなって再度登場する。そのとき、先述の雑談場面の真紀の微妙な態度の意味を、私たちは理解することになる。つまり『カルテット』においては、常識的には「唐揚げにおけるレモン」のような添え物的役割であるはずの雑談が複雑な水脈のように張り巡らされ、作品世界を潤す役割を果たしているのである。（『ユリイカ』2021: 222）

実際、この食事シーンはストーリーを前に転がす役割を果たしている。そして断りなく唐揚げにレモンをかけた司とすずめに対して、論高は次のようにストーリーの核心をつくような台詞を口にする。

論高「レモンするってことはね、不可逆なんだよ」
司「ふかぎやく」

論高「二度と元には戻れないの」(坂元 2017a: 20)

カルテットの演出を務めた土井監督は、この唐揚げのシーンに対して以下のようなコメントを残している。

土井「これがやっぱり後々ずっと見ていくと、人生っていうのは不可逆なのだというなんか深いテーマに実は繋がっていくという」²³

そして第一話の終盤、3人に夫が失踪したことを告白する真紀は、過去に起きた夫との話をこう締め括る。

真紀「絶対なんてないんです。人生ってまさかなことが起きるし、起きたことはもう元には戻らないんです。(微笑み) レモンかけちゃった唐揚げみたいに」(坂元 2017a: 55)

真紀が夫とすれ違っていく様子は第六話で詳しく語られる。第六話では、自宅で真紀と夫の幹生が夕食をとるシーン(図3)と、幹生が会社の後輩と居酒屋で唐揚げを食べるシーン(図4)の2回に渡って唐揚げが登場するが、そのどちらもカメラは唐揚げをクローズアップで捉えている。これは、「唐揚げ」が物語において重要であることを観客に示す演出と言える。

坂元が唐揚げを重視していたことは、『カルテット』の最終回における最後の食事シーンにも唐揚げが出てくることから明らかである。第一話では躊躇なくレモンをかけていた別府とすずめは、各自の小皿に唐揚げを取り分けてレモンをかけるが、大皿に置いてあるパセリを蔑ろにしてしまう(図5)。それに対し論高は、パセリの存在意義について説得し始める。

論高「パセリがある時とない時」

23 火曜ドラマ『カルテット』DVD BOX&Blu-ray BOX「本編オーディオコメンタリー(第1話)」(2017年)

論高、唐揚げの横にパセリを置いたり外したりして。

論高「ある、ない、ある、ない、ある、ない。どう？無いと淋しいでしょ？殺風景でしょ？この子たち、言ってるよね、ここにいるよーって」

すずめ「どうすれば良かったんですか？」

論高「心で言うの（と、真紀を見る）」

真紀「サンキュー、パセリ」

論高「サンキューパセリ。食べても食べなくてもいいの、そこにパセリがあることを忘れちゃわないで」（坂元 2017b: 225）



図3 幹生に断りなく唐揚げにレモンをかける真紀（第六話 16:50）

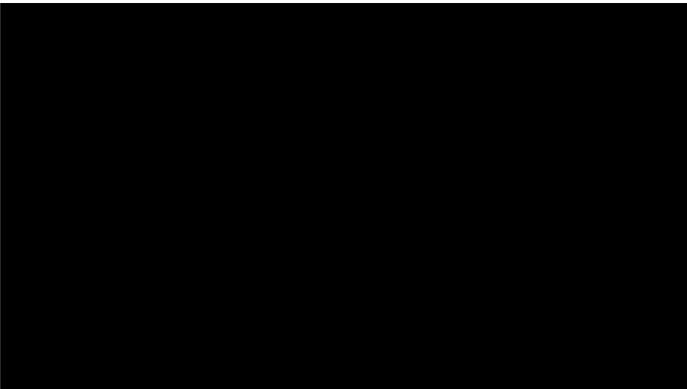


図4 居酒屋で幹生が注文した唐揚げ（第六話 33:30）

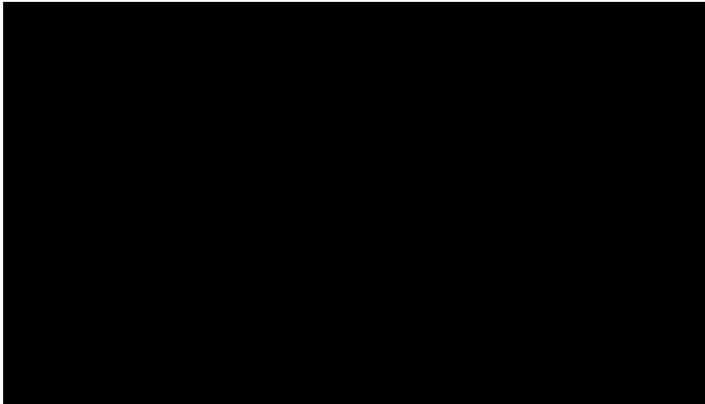


図5 蔑ろにされるパセリ (第十話 39:13)

この食事シーンは、第一話で触れられた唐揚げについて別の角度から触れるとともに、唐揚げを惹きたてるために添えられたパセリのように、物事には、重要ではないかもしれないが、大切な役割を果たしているものがあることを暗喩しているのではないだろうか。それはドラマにおける食事シーンの位置付けについても同じことが言えるだろう。

3.3.2 “人物についての情報を明らかにする”ための食事シーン

上述の唐揚げのシーンにおいて登場人物の性格や価値観が少しずつ明らかになっていたように、食事シーンには、フィールドが言及していたように登場人物の情報を明らかにする役割も持っている。ここでいう情報とは、登場人物の性格や価値観のみならず、感情も含まれる。

坂元裕二が手がける脚本では、観客に伝えたい情報を台詞などで直接的に描くのではなく、あらゆる演出の方法を使って間接的に表現していることが多くある。坂元は「『登場人物が本当のことを言わない』というのは僕のベースになってることで、本心をそのまま言葉にできる登場人物に魅力を感じない」と述べている。(久保 2018: 5) また『カルテット』の第二話には、それを代弁するかのような台詞がある。

真紀「はっきりしない人って、はっきりしないはっきりした理由があるし、人を好きな気持ちって、何もしなくても、何も言わなくても、勝手にこぼれちゃうものじゃない」(坂元 2017a: 111)

また坂元は、脚本を書く作業について、本質（観客に伝えたい情報）の周辺を何気ない会話や些細な仕草で書き込むことで表現することだと話している（図6）。

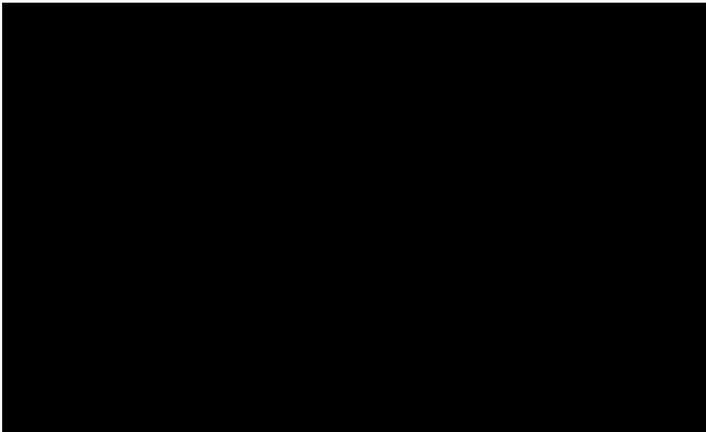


図6 「スキ」とそのまま書くのではなく、「スキ」の周辺にある日常を徹底的に書き込むことで「スキ」という気持ちを浮かび上がらせることが脚本を書く作業だと説明する坂元（『プロフェッショナル仕事の流儀』2018）

これは、多くの脚本家が意識していることでもある。20世紀、数々のハリウッドの脚本家に影響を与えてきたシナリオ講師であるロバート・マッキー（1997）は、「登場人物の心の深層の思考や感情が、登場人物の発言や行動によって表現されるダイアログとアクティビティを書くこと」と述べ、ブレイク・スナイダー（2005）は「薄っぺらなセリフがいかにも退屈で、スペースの無駄か」と記述している。（ガリーノ、シアーズ 2021: 157）

では、『カルテット』において坂元は、どのように直接的な表現を用いず、

登場人物の情報を明らかにしているのだろうか。ここでは登場人物の情報を、人物の特徴、感情、人物同士の関係性の3点に分けて論じる。

3.3.2.1 登場人物の特徴を明らかにするための食事シーン

Boswell (1993) は食事シーンが「プロットや登場人物を構築するのに重要なガイドになる」と述べている。『カルテット』における具体的なシーンとして、ここでは登場人物の性格ないし物語における人物の特徴を観客に印象づけるために食事が効果的に使われているシーンを3つ取り上げる。

1つ目は、すずめが三角パックのコーヒー牛乳を飲むシーンである。全10話のドラマのなかで、すずめが三角パックのコーヒー牛乳を飲んでいる様子は合計16回のシーンで描かれている(図7)。観客は三角パックのコーヒー牛乳が出てくるたびに「世吹すずめ」を連想することになり、ドラマ中においても、真紀は第二話と第八話の2回、「すずめちゃんこれ好きでしょ」と、すずめのためにこのコーヒー牛乳を買ってきている。坂元は脚本を描き始める前に登場人物の過去について書いた履歴書を用意するが、『カルテット』における4人の履歴書を見ると、真紀は37歳、司は33歳、論高は36歳、そしてすずめは31歳と設定されている(久保 2018: 156-168)。4人のなかで

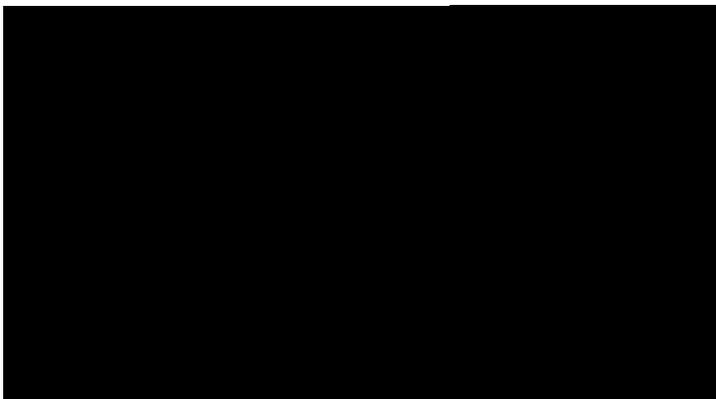


図7 他の3人が赤ワインを飲むなか、三角パックのコーヒー牛乳を飲むすずめ
(第一話 14:32)

も最年少であり、周りから「すずめちゃん」と呼ばれ、いわゆる“妹”のようなポジションにいるすずめが、赤ワインやブラックコーヒーではなく、「三角パックのコーヒー牛乳」をストローで飲んでいる描き方は、作中に何度も描かれることから、世吹すずめの特徴を演出していると言えるのではないだろうか。

2つ目は、第三話で有朱が4人が生活する別荘に訪ねたときのシーンである。ここで有朱がうさぎの形をしたショートケーキを躊躇いなくフォークでぶっ刺すショットがあり、クローズアップで表現されている（図8）。



図8 ぶっ刺されるショートケーキのうさぎ（第三話 4:40）

すずめ、うさぎのキャラクターを手にして、可愛いから食べ辛いなあと思っていると。

有朱、うさぎの頭を普通に食べた。

有朱「何で彼氏作らないんですか？」

すずめ「何で。何でかな 告白とか苦手で」

有朱「告白は子供がするものですよ、大人は誘惑してください」

すずめ「誘惑。誘惑って」

有朱「誘惑はまず、人間を捨てることです」

すずめ「人間を捨てる。大丈夫ですか？」

有朱「大体三つパターンがあって。猫になるか、虎になるか、雨に濡

れた犬になるか、三つです、誘惑は」(坂元 2017a: 118)

これは有朱のサイコパス的な性格を示すと同時に、その後、狙った男の心を射止めるテクニックを、うさぎ以外の動物に例えながら披露する展開を示唆しているとも考えられる。

最後に取り上げるのは、ドーナツのシーンである。4人が組む弦楽四重奏の名前は「カルテットドーナツホール」。これは穴がなければドーナツでないと同様に、何かが欠けている4人が奏でるからこそその音楽があるという意味を込めて名付けられた。

司「僕たちの名前はカルテットドーナツホールですよ。穴が無かったらドーナツじゃありません。僕はみんなのちゃんとしてないところが好きなんです。」(坂元 2017b: 148)

実際に、食べ物としてのドーナツはドラマ中に4回登場している(司は「ふくろうドーナツ」という商品を販売する会社に務めており、作中にそのドーナツが4回登場している)(図9)。上述に引用した台詞も、別府司はドーナツを手を持って喋っている(図10)。坂元は、4人それぞれに欠けている部

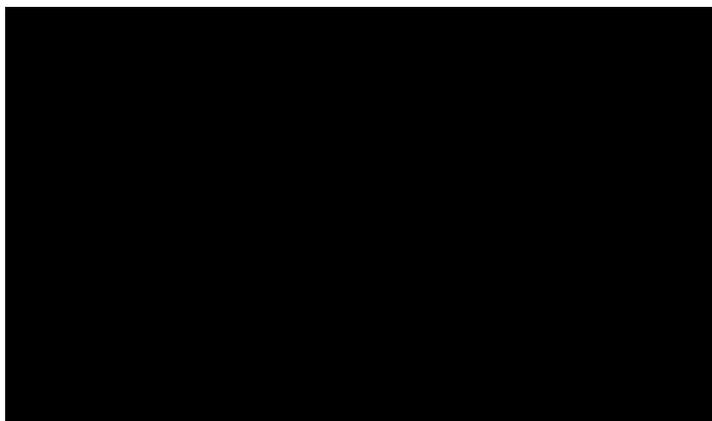


図9 ふくろうドーナツ (第九話 7:39)

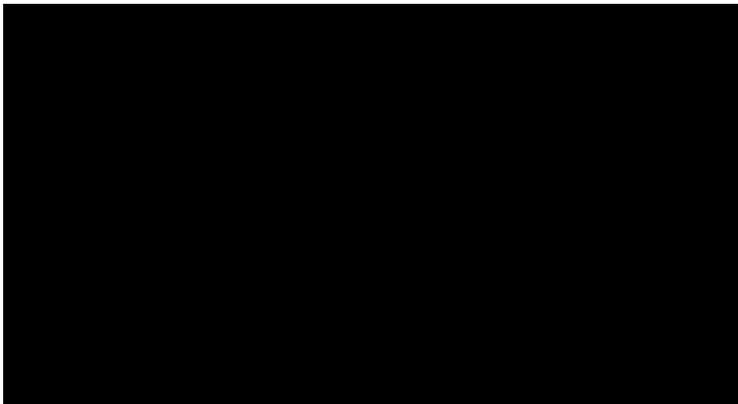


図 10 ドーナツを手にもつ別府（第九話 7:45）

分があるという登場人物たちの情報を、ドーナツを用いて表現していたと言えるのではないだろうか。

3.3.2.2 登場人物の感情を明らかにするための食事シーン

次に、登場人物の「感情」を明らかにするための食事シーンについて考察する。具体例として、第三話で真紀とすずめがかつ丼を食べるシーンを取りあげる。すずめは幼少期に父親からインチキな超能力を教えられ、魔法少女としてテレビにも出ていたが、そのインチキが週刊誌で告発されてからは、嘘つき者として世間から非難を浴びていた。嘘つき魔法少女としての過去はネット上から消えることはなく、すずめはいつまでも後ろめたく生きるしかなかった。そんな過去から、父親の命があぶないと聞いても病院に行く気持ちにはなれず、病院の近くを歩いているところを真紀に見つけられてしまう。2人は蕎麦屋に入り、カツ丼を注文し、すずめの父親がさっき亡くなったことを知っていた真紀はすずめにそれを伝えるが、同時にすずめの父親との過去を聞くことになる。すずめの気持ちを思いはかった真紀は「病院いなくていいよ。かつ丼食べたら軽井沢帰ろ」とすずめの手を握る。そしてカルテットはすずめの「居場所」だと伝える。

すずめはかつ丼を食べている。

真紀も食べる。

がつがつと食べるすずめの目から涙がひとつ落ちる。

真紀、ちらっと見て、食べながら。

真紀「泣きながらご飯食べたことある人は、生きていきます」

すずめ「(少し真紀を見て、また食べる)」

がつがつと食べる二人。(坂元 2017i: 151)

これは蕎麦屋のシーンであり、蕎麦を注文するのが自然である（店が蕎麦屋であることは、二人が店に入る際の暖簾で分かるようになっている）。第八話で蕎麦を食べるシーンが登場することから、蕎麦をドラマに用いるのは難しいことではないはずだ。しかしここで二人が「がつがつと」食べていたのは「かつ丼」だった。また、かつ丼は注文する際の台詞を通して提示されるだけでなく、クローズアップショットとして画面に映されている（図11）。この演出は、すずめと真紀が食べているのは「何かしらの丼」ではなく、「かつ丼」であることを伝える役割を果たしている。日本では、よく験担ぎの料理として“勝つ”丼を食べる風習があるが、このシーンは、すずめが抱えていた過

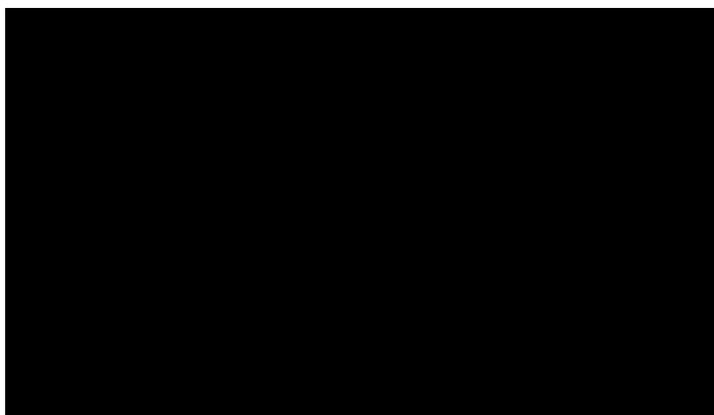


図11 クローズアップショットで映されるカツ丼（第三話 34:34）



図 12 泣きながらカツ丼を頬張るすずめ（第三話 37:26）

去に打ち勝ち、前に進む様子を「かつ丼」を食べることに重ねているのではないだろうか。蕎麦をすすめるのではなく、丼を持ってかつ丼をががつと食べるシーンには、すずめの強い意思や生きる希望が感じられる（図 12）。

また、単に食事をしているシーンだけが食事シーンではない。『カルテット』では、「食事」を用いることで直接的な表現を避けた会話劇が多くあり、登場人物の感情が効果的に表現されていた。具体例として、第一話の終盤に登場する「コーン茶」のシーンを考察したい。このシーンでは、4人の主人公たちは会話の気まずさに耐えられなくなり、「コーン茶を入れる」ことを提案して気を紛らわしている。司、諭高、すずめは、真紀がベンジャミン瀧田の嘘をレストラン「ノクターン」に報告し、ステージから降板させた行動に複雑な感情を抱いているも、どう説明したらいいかわからず、「コーン茶」と言いながら席を立とうとする。つまりここでは、「気まずいのでこの話はやめませんか」ではなく、「コーン茶いれてきます」という台詞になっているのである。

同様のシーンが、第六話にも登場する。真紀は夫との間にできてしまった溝への悲しみを堪えられなくなり、餃子を準備しながら、「ごめん、ラー油忘れちゃった。ちょっとコンビニ行ってくるね」と家を出る。キッチンにはしっかりとラー油があることがその後のショットで観客に提示され、観客は、

真紀が嘘をついて家を出て行ったことがわかる(図13)。このとき坂元は、「悲しくて耐えられないから外に出てくるね」ではなく、「ラー油を買いに行ってくる」という台詞を選んでいる。そして真紀が家を出たあと、夫・幹生も逃げるように家を出る。二人が餃子を食べることはない。この点も、実現しなかった食事シーンを前に、間接的な台詞で登場人物の感情を表現している一例と言えるだろう。



図13 キッチンに置かれているラー油 (第六話 37:59)

3.3.2.3 登場人物同士の関係性を明らかにするための食事シーン

登場人物の情報は、個人の性格や感情だけでなく、登場人物間の関係性もその1つに含まれる。食卓を囲んで唐揚げを食べるシーンが、4人の共同生活ぶりを表現しているように、食事シーンは登場人物同士の関係も表現するためにも効果的にも用いられている。共同生活する4人は、見事に四角関係でできていた。論高はすずめを、すずめは司を、司は真紀を想っている(そして真紀は、失踪した夫・幹生のことを想っており、五角関係でもあったともいえる)(図14)。

第八話において、司と真紀の幸せを願いながら、司の片想いが成就するように働きかけたり、仕事を始めることで自立しようとしたり努力をするすずめだが、それを見ていた論高は、家でお腹を空かせているすずめのためにた

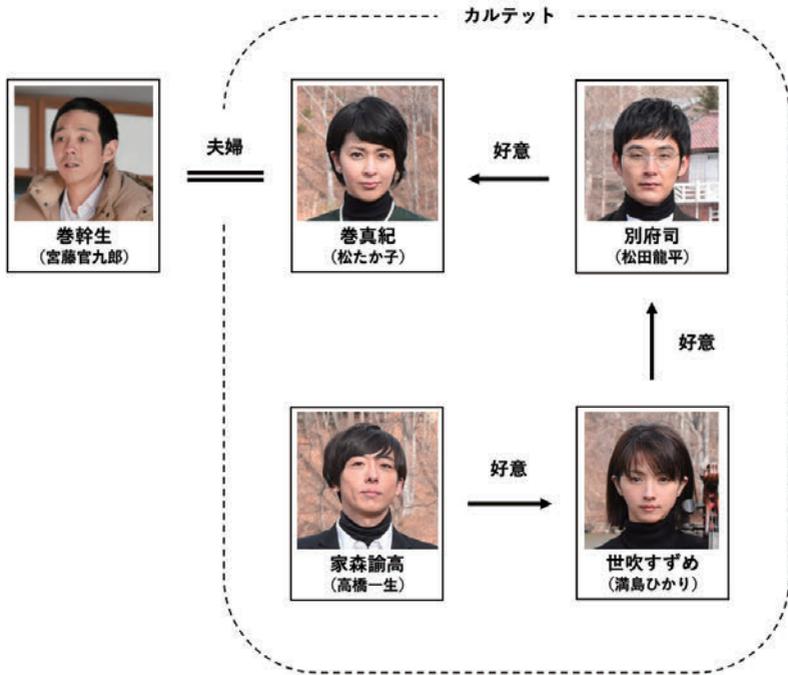


図 14 『カルテット』登場人物相関図²⁴

こ焼きを買って帰る（図 15）。すずめは第二話で司とコンビニでアイスを買った夜、司が両手にもつアイスを見て、「じゃ 左手」と司が左手に持っているアイスを選ぶ（図 16）。そして司の横に座り、照れながらも並んでアイスを食べる。また第八話では、司の真紀に対する片想いが成就するように、真紀に対して「真紀さん、別府さんに聞いてみたら？冷蔵庫にアイスありますよ。持ってって、ついでになにげに話せばいいじゃないですか」と提案する。この提案は「アイスと一緒に食べる」ということがすずめにとって司との大切な思い出であり、それを真紀にも勧めているに他ならない。司は第四話で真紀のために栗を剥く。「あ、いいですいいです」と断る真紀にまた次の栗

24 この相関図は、『カルテット』公式サイトを参考に、著者が独自に作成したものである

を剥いて差し出す（図 17）。そして最後に「あなたといると二つの気持ちが混ざります。楽しいは切ない。嬉しいは寂しい。優しいは冷たい。愛しいは、虚しい。（真紀を見つめて）愛しくて愛しくて、虚しくなります」と伝える。真紀は、第六話の回想シーンで幹生のためにミンチ肉をこねながら「今のこれがわたしのやりたいことだよ」と微笑む（図 18）。そして第七話で失踪していた幹生と再会した時「痩せた。ご飯は？ 食べてる？」と聞く。

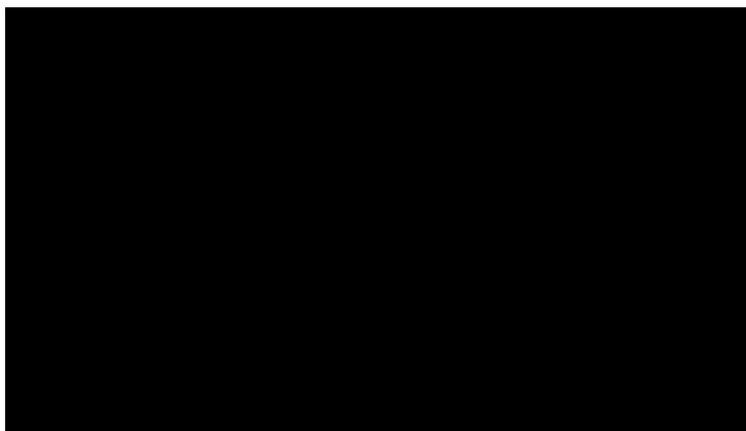


図 15 家森が買ってきたたこやきを食べるすすめ（第八話 33:47）

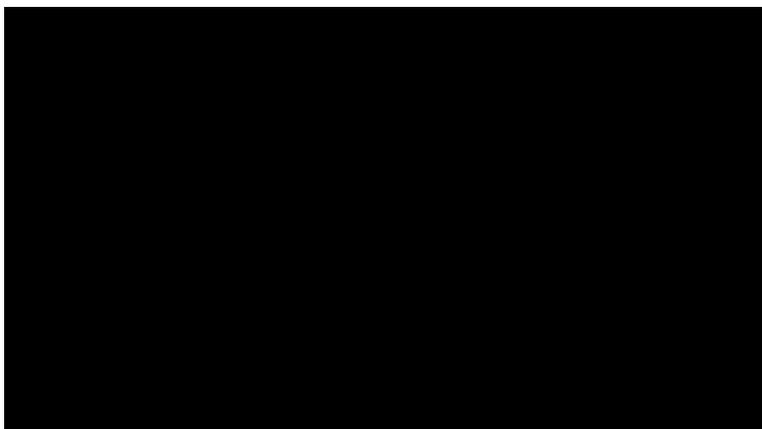


図 16 別府が両手にもつコンビニのアイス（第二話 14:24）



図 17 別府が真紀のために剥いた甘栗（第四話 40:57）



図 18 真紀がこねるミンチ肉（第六話 21:33）

これらに共通していることは、食事シーンを通して登場人物が抱く誰かへの想いが露わになっている点である。それぞれが好意を寄せる相手に食事を用意したり、一緒に何かを食べたり、ちゃんとご飯を食べているかを心配したりしている。

登場人物同士の関係を表現するための食事シーンは、ハリウッド映画でも効果的に用いられている。ハリウッド映画における食事シーンについて、

Boswell (1993) は以下のように述べている。

我々は、食べ物や食事シーンを通して登場人物同士の関係を理解していると言える。食事シーンほど、家族同士のやりとりや恋愛関係を理解するのに価値のあるシーンはないかもしれない。そしてそれは、食事シーンの含まれていない映画、ないしハリウッド作品がほとんどない理由を説明できるだろう。(Boswell 1993: 8)

つまり、多くのハリウッド映画は、家族や恋愛関係など、人物同士の関係を食事シーンから読み解くことができると述べられている。これはハリウッド映画のみならず、日本のテレビドラマにも応用でき、坂元はそれを脚本の中で表現している。

またこれは第二章で取り上げた関沢 (2014) が論じる食事の「関係強化機能」にも当てはまる。「食事を作ることは、間接的なコミュニケーション」(Kaufmann 2005: 222) であり、「一緒に食事をすることは、社会的関係の中心に位置する」のであり、「食事の場において、食べ物、その味わい、価値、そして私たち自身を分かち合うことで、家族や友人関係が作られる」(Counihan 1999: 6) ののである。

3.4 坂元が食事シーンを通して描く「日常性」の意義

上述の通り、坂元は『カルテット』のあらゆる場面で食事シーンを効果的に挿入し、シーンとしての役割を強固なものにしていた。しかしそれは単にストーリーを前に転がしたり、登場人物の情報を明らかにしたりするためだけだったのだろうか。ここでは、坂元が食事シーンを通して日常性を演出しようとして試みていた点と、それが坂元脚本の独自性に繋がっている点について論じたい。これは、これまでの脚本・映像研究において多くは述べられてこなかった点である。しかし、坂元裕二脚本がそうたる理由のひとつがここにあり、今後の脚本研究においても着目に値する点だと考える。

まず、坂元は脚本家・宮藤官九郎との対談の中で、坂元の脚本には食事シー

ンが多いことを同業の宮藤にも指摘されている。(宮藤官九郎は、『カルテット』においても俳優として巻幹生を演じている。)

宮藤「あと、坂元さんの脚本は食べ物に関する描写が多いですね。」
坂元「そうですね。“ただ喋ってる”っていう場面が苦手なんですよ。食べることに限らず、何かしながらついでに喋るような感じで書くようにしているんです。」(久保 2018: 56)

そして本稿冒頭と第一章で引用したように、坂元は日常性を表現するための重要なものとして食事シーンの挿入を自覚的に選択している。

「日常」とは、人間の生存と社会の維持にとって基本的な意味をもつ定常的、反復的な生活のことを意味する。つまり、「日常」を表現し、作品に日常性を演出するためには、俳優が人間らしく、不自然でない演技をする必要がある。俳優の自然な演技を生み出す伝統的な方法として、映画学者のデイヴィッド・ボードウェルとクリスティン・トンプソンは、以下のように指摘している。

映画演技では、現実的な振る舞いと考えられているものに似せようとする伝統が長く続いてきた。このリアリズムの感覚は、俳優にせりふを言わせながら些細な動作をさせることによって生み出されることがある。(ボードウェル、クリスティン 2007: 197)

また日本を代表する演出家である平田オリザ(2004)は、俳優の自然な台詞を引き出すために「自分が台詞を言っている時に、足を組み直したり、何か意識して他の動きを入れてみるように指示」をすることが有効的であると述べている。身体に負荷をかけることで「意識を分散」させ、自然な台詞や演技を引き出しているのだ。つまり、人間が日常的に違和感なく行う自然な演技(現実的な振る舞い)を引き出すために、台詞と同時に俳優に動作を行わせることは、坂元が「何かのついでみたいに台詞を喋ってほしい」と言うように、食事シーンを脚本に多く取り入れることで、俳優は料理をしたり食べたりといった動作を行うことになり、自然な演技ないしは人間らしいシーン

に繋がっている点に通じている。

『カルテット』で監督を務めた土井裕泰も、坂元の脚本に垣間見える日常性についてこのように述べている。

坂元さんの脚本は、やっぱりちゃんと「人間」が描かれているんですよ。だから、ドラマが終わってしまっても登場人物たちが観た人のなかで生き続けるんです。僕も時々『カルテット』の四人のことを考えてしまったり、日常のなかで彼らの言葉がふっと蘇ったりする瞬間があったりするんです。(久保 2018: 89)

では、坂元はなぜ日常性を演出しようとするのか。それは、観客の日常にドラマがふと入り込み、生活を少しでも彩ることこそが坂元の考えるテレビドラマの魅力だからだと考えられる。坂元はテレビドラマの魅力を以下のように述べている。

「登場人物たちがお客さんの生活の中にポツと紛れ込んで、ただその人たちのことを好きになって、毎週観る。僕はそれがテレビドラマの一番気に入っているところです。」²⁵

なお、坂元が日常生活で大切にしていることの1つに、娘のお弁当作りがある。どんなに忙しくても妻と交代で毎朝5時に台所に立ち、12年間1日も休まずお弁当を作り続けてきた。そして「何においてもお弁当が大事なんですよ」(『プロフェッショナル仕事の流儀』2018)と話す坂元は、子育てを通して日常の大切さに気づいたと以下のように話している。

子どもが生まれてから、自分は生活してるんだと実感がもてた。日常っていうのは絶対追いかけてくるし、それを捨てちゃいけないんだって、

25 Yahoo!JAPAN ニュース「テレビからこぼれているものを書きたい」ー人気脚本家・坂元裕二が語る連ドラの役割、2018年 (<https://news.yahoo.co.jp/feature/1093/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

こっちのほうがよっぽど大事なことだっていうことが分かったんです
よね（『プロフェッショナル仕事の流儀』2018）

脚本家として以前に、一人の人間として「日常」を大切に、自らも普段からお弁当作りを通して食事シーンの中に生きている坂元だからこそ、これほど多くの食事シーンを効果的に用い、日常性を巧みに表現しているのではないだろうか。また、その日常性を帯びたシーンは観客にも馴染みがあり、生活するなかで登場人物や台詞がふと蘇りやすくなっているのではないだろうか。それは、坂元がテレビドラマの魅力として言及している点である。そして、この食事シーンを多用した脚本による日常性の演出は、観客からの支持はもちろん、他の脚本家や演出家からも言及されるほどに彼の脚本の特徴でもあるのだろう。

結論

これまで坂元裕二脚本における日常性の表現を食事シーンの活用という側面から考察してきた。本稿をまとめると、第一章では、坂元裕二が脚本家として権威や影響力を持っており、人を人らしく描くために細部の台詞にまでこだわって「日常性」を演出していることを明らかにした。続く第二章では、映画学の歴史においても食事シーンは国内外で重要な役割を果たしてきたことを明らかにした。具体的には、ハリウッド映画から日本のテレビドラマまで、食事シーンは「プロットや登場人物を構築するのに重要なガイド」として数々の作品で効果的に挿入されていることが分かった。それらを踏まえ、第三章では、テレビドラマ『カルテット』の食事シーンを分析することで、坂元脚本における食事シーンは、シド・フィールドが言及するシーンの役割、つまり単にストーリーを展開させ、登場人物の情報を明らかにするだけでなく、坂元が大切にする「日常」をドラマのなかでも効果的に演出していることを考察することができた。これは、坂元裕二脚本を実際に演じた高橋一生と満島ひかりが指摘したように、「決して誰かを取りこぼすことなく、日常に繊細に寄り添うもの」の背景を客観的に言語化することに繋がっていると

考える。そして脚本の歴史においても、食事シーンを通した日常性の演出という観点が今後にも大きく貢献することを願っている。

しかし、坂元の脚本がこれほど評価され、世間の注目を集める理由については他にも観点があると考えている。今回明らかになった坂元脚本における「日常性」を踏まえ、まだ明らかにできていない坂元脚本の魅力は今後の課題としたい。そしてここまで読んでくださった方が、少しでも坂元裕二脚本に興味をもち、作品を遡ったり、今後の作品に触れたりするきっかけに本稿がなれば幸いである。

最後に、本稿を執筆するにあたってお世話になった板倉史明先生、日本学コースの先生方に感謝を申し上げます。特に板倉先生には大学2年時から映画をアカデミックに考察する面白さを多く教えていただき、本稿の執筆においても細部まで丁寧にアドバイスをいただきました。先生と出会えて、映画学の奥深さを知り、映画やドラマをさらに好きになりました。本当にありがとうございました。

参考文献一覧

■書籍

今泉容子（1999）「食事する日本映画」『文藝言語研究・文藝篇』36号、筑波大学文藝・言語学系、97-136

今泉容子（2002）「食卓シーンのカメラワーク：日本映画の場合」『文藝言語研究・文藝篇』41号、筑波大学文藝・言語学系、51-106

久保忠佳（2018年）『脚本家 坂元裕二』株式会社キャンビット

坂元裕二（2017年 a）『カルテット 1』河出書房新社

坂元裕二（2017年 b）『カルテット 2』河出書房新社

シド・フィールド（安藤紘平・加藤正人・小林美也子・山本俊亮 訳）（2009年）『映画を書くためにあなたがしなくてはならないこと』フィルムアート社

関沢英彦（2014）「映画に描かれた『料理』と『食事』の4類型——一皿のコミュニケーションを巡って——」『コミュニケーション科学』（39）, 東京経済大学コミュニケーション学会、51-80

高橋世織（2011）「『家族』表象と映画メディア——リュミエール映画から小津安二郎『東京物語』まで」『総合文化研究所年報』第18号 167-182

西山大貴、石井晃、鈴木康之（2019年）『視聴率データによる視聴行動の分析』『第18回情報科学技術フォーラム（第一分冊）』,91-92

平田オリザ（2004年）『演技と演出』講談社現代新書

ポール・ジョセフ・ガリーノ、コニー・シアーズ（石原洋一郎 訳）（2021年）『脚本の科学』フィルムアート社

ボードウェル・デーヴィッド、クリスティン・トンプソン（藤木秀郎 監訳、飯岡詩朗・板倉史明・北野圭介・北村 洋・笹川慶子 訳）（2007年）『フィルム・アート——映画芸術入門』名古屋大学出版会

『ユリイカ 特集：坂元裕二（2021年2月号）』第53巻第2号、青土社、2021年

■インターネットサイト

第33回「ヤングシナリオ大賞」大賞は生方美久さんの「踊り場にて」！「坂元裕二さんみたいに、唯一無二といわれる脚本家に」（<https://www.fujitv-view.jp/article/post-435944/> 最終閲覧日 2022年1月8日）

映画『花束みたいな恋をした』公式サイト（<https://hana-koi.jp/> 最終閲覧日 2022年1月9日）

「第7回 コンフィデンスアワード・ドラマ賞」

(<https://www.oricon.co.jp/confidence/special/54647/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

「コンフィデンスアワード・ドラマ賞 年間大賞 2017」

(<https://www.oricon.co.jp/confidence/special/54646/#link11> 最終閲覧日 2022年1月18日)

「受賞結果総評 | 第92回ザテレビジョンドラマアカデミー賞」

(<https://thetv.jp/feature/drama-academy/92/awards/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

「ギャラクシー賞概要 - NPO 法人 放送批評懇談会」

(<https://www.houkon.jp/galaxy/galaxy/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

「国際ドラマフェスティバル:東京ドラマアウォード」

(<https://j-ba.or.jp/drafes/award/index.html> 最終閲覧日 2022年1月18日)

「芸術選奨 | 文化庁」

(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/jutenshien/geijutsuka/sensho/>
最終閲覧日 2022年1月18日)

【公式】火曜ドラマ『カルテット』(@quartet_tbs) / Twitter

(https://twitter.com/quartet_tbs 最終閲覧日 2022年1月18日)

『A LIFE ~愛しき人~』TBS テレビ (@A_LIFE_tbs) / Twitter

(https://twitter.com/A_LIFE_tbs 最終閲覧日 2022年1月18日)

金曜ドラマ『下剋上受験』★金曜よる10時 (@gekokujo_tbs) / Twitter

(https://twitter.com/gekokujo_tbs 最終閲覧日 2022年1月18日)

火曜ドラマ「カルテット」(@quartet_tbs)・Instagram

(https://www.instagram.com/quartet_tbs/ 最終閲覧日 2022年1月18日)

日曜劇場「A LIFE ~愛しき人~」TBS (@a_life_tbs)・Instagram

(https://www.instagram.com/a_life_tbs/ 最終閲覧日 2022年1月18日)

金曜ドラマ『下剋上受験』公式! (@gekokujo_tbs)・Instagram

(https://www.instagram.com/gekokujo_tbs/ 最終閲覧日 2022年1月18日)

スタッフ | TBS テレビ : 火曜ドラマ『カルテット』

(<http://www.tbs.co.jp/quartet2017/staff/> 最終閲覧日 : 2022年1月6日)

「脚本家・坂元裕二インタビュー (1)」『CRÉA』2018年10月19日

(<https://crea.bunshun.jp/articles/-/20996?page=3> 最終閲覧日 2021年12月16日)

「カルテット【TBS オンデマンド】」Amazon Prime Video

(https://www.amazon.co.jp/gp/video/detail/B01NAUGPBE/ref=atv_hm_hom_1_c_105khD_brws_2_3 最終閲覧日 2022年1月19日)

Yahoo!JAPAN ニュース「テレビからこぼれているものを書きたい」——人気脚本家・

坂元裕二が語る連ドラの役割、2018年 (<https://news.yahoo.co.jp/feature/1093/> 最終閲覧日 2022年1月18日)

■外国語文献

Boswell, Parley Ann (1993) "Hungry in the Land of Plenty: Food in Hollywood Films" in Paul Loukides and Linda K. Fuller (ed.) (1993) *Beyond the Stars III: The Material World in American Popular Film*. Bowling Green: Bowling Green State University Popular Press, pp.7-23.

Counihan, C. M. (1999) *The Anthropology of Food and Body: Gender, Meaning, and Power*. New York: Routledge

Kaufmann, J-C. (2005) *Casseroles, amour et crises*. Paris :Armand Colin. = 2010 Translated by Macey, D. *The Meaning of Cooking*. Cambridge: Polity

■映像作品

『プロフェッショナル仕事の流儀——「生きづらい、あなたへ～脚本家・坂元裕二～」』

2018年11月12日 22:25～23:10、NHK 総合
火曜ドラマ『カルテット』DVD BOX&Blu-ray BOX「本編オーディオコメンタリー（第
1話）」（2017年）